

第103号

研究所報

三好教育研究所

令和4（2022）年度

ご あ い さ つ

「三好教育研究所所報 第103号」の発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。三好教育研究所では、「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動」を研究主題に、三好郡市内各園各校のご協力をいただきながら、研究・研修活動を行ってまいりました。

今年度の研究発表会では、加茂小学校 久原有里先生・森長拓哉先生から「ポジティブな行動支援の手法を活かした授業改善の取組～『わかった』を『できた』にする算数科の授業づくり～」、三好教育研究所 上野三千代研究員から「低学年におけるひらがな、カタカナの効果的な指導」を研究テーマにしたすばらしい研究実践をご報告いただきました。

その後の講演会では、ICT教育およびGIGAスクール構想の実践的研究およびその普及に関して全国的なリーダーとして活躍されている、徳島県上板町立高志小学校長 中川斉史校長先生を講師にお招きして、「『GIGA端末がもたらす他律から自律への転換』～子供も教師も自ら主役となって大胆な変革を～」と題したご講演を拝聴し共に研修を深めました。特に、GIGAスクール構想により導入された一人一台端末を有効に活用した数々の実践事例は、今後の各園各校での取組に大いに参考になるものでした。事後のアンケートにおいても多くの会員から、「たいへん有意義な研修であった」「今後もさらにGIGA端末を有効活用した授業や教育活動実践例、また教員の業務改善に役立つ方策等を教えてほしい」などの声をいただいています。また、今回は昨年のズームを使ったオンライン研修から、現場研修会とオンライン配信を組み合わせたハイブリット研修という形で実施しました。三好教育会役員や研究発表会協力委員のみなさんにご協力いただきながら、様々な機器を活用してスムーズに配信できるように備えました。しかしながら、スライドや動画の停止、音声の聞き取りにくさ等があったとのご指摘が寄せられました。今後の改善点として対応策を検討してまいります。

さて、本研究所では今年度も、小教研情報部会およびへき地複式部会との連携による研究推進、中堅教員・管理職に対する学校運営研修、徳公教組とタイアップした若手教員の採用研修などに取り組んでまいりました。また、教育機器の整備・貸し出しやミライムの設定、DVDダビング等のお世話を担わせていただきました。微力ではありますが、三好郡市内各幼小中の教育活動や次代の三好教育を担う教員の人材育成に寄与できたものと考えております。

また、例年同様7名の先生方に委嘱研究をお願いして、研究主題・テーマに沿った研究実践についてのご報告をいただきました。研究所報におまとめいただいた貴重な研究成果は、各園各校の先生方の今後の教育実践に大いに役立つものと確信しています。ぜひご覧いただき、参考にいただければ幸いです。校務ご多忙の中、ご執筆いただいた先生方、本当にありがとうございました。

今、国際情勢に目を転じると、ウクライナ問題や米中の対立、国内情勢では物価高騰や少子高齢化問題など、時代はまさしく混沌とした状況を迎えています。教育現場においても、コロナ禍の影響による生活様式の変容やGIGAスクール構想によるデジタル化の進展、教職員の働き方改革、部活動の民間移行など、学校を取り巻く環境が大きく変化しています。

このような厳しい状況の中ではありますが、明日を担う三好郡市内の子どもたちが心豊かにたくましく生き抜く力を身につけられるような教育を展開していかなければなりません。三好教育研究所も三好郡市内の先生方と共に手を携え、その一助を担えるように鋭意努力してまいります。今後とも変わらぬご指導ご協力をいただけますようよろしくお願いいたします。

令和5年3月

三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

—— 委嘱研究員研究 ——

- 遊びや生活を通して，生きる力の基礎を育む 1
～園での遊びや経験から幼児の学びにつながるための保育のあり方～
池田幼稚園 教諭 赤堀 奏子
- 学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）の実践 4
～「ひるまっこチャレンジプロジェクト」を通して～
昼間小学校 教諭 逸見 香織
- 課題の解決に向けて考え続け，よりよい社会を切り拓く子どもの育成を目指して..... 7
—ごみ処理の学習から，地域の一員としての自覚を養う—
辻小学校 教諭 住友 優花
- 特別支援学級におけるポジティブな行動支援.....11
～学習・生活をプラスのサイクルにするための実践～
三縄小学校 教諭 中瀧 由紀
- アウトメディアから始める 児童が主体的に改善していく生活習慣14
三好市山城・西祖谷・東祖谷地区小学校養護部会
- 科学的な思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり17
～「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業実践を通して～
三加茂中学校 教諭 佐藤 真也
- 変化する時代の中で，学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方20
～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～
井川中学校 教諭 田口 智也
- 令和4年度 教育研修・研究事業報告23
- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～）25

研究主題

遊びや生活を通して、生きる力の基礎を育む ～園での遊びや経験から幼児の学びにつながるための保育のあり方～

池田幼稚園 教諭 赤堀 奏子

1 はじめに

幼児期は、自然な生活の流れの中で直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎を培う時期である。幼稚園教育要領では、平成 29 年の改訂にともない、幼児教育で育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が示された。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿も明確化され、就学までにこれを基盤に、幼稚園教育から小学校教育への円滑な接続を図ることが求められている。幼児は、この幼児期の間に、生活の中の様々なものから刺激を受け、小さな発見や感動体験から不思議さ、面白さを感じている。そのような直接体験から、気付いたり考えたりすることにつながり、学びへと発展していく。

しかし、近年子どもたちを取り巻く環境は、新型コロナウイルス感染症の影響で様々なことが制限され、園での行事も縮小化される中、家庭でも遊ぶ場や人との関わりが減少している。本来幼児期において経験できる、豊かな感性を育む貴重な場が少なくなり、子どもたちの生活の形態も大きく変化してきている状況にある。また、戸外で遊ぶ機会が減り、ゲームをしたり、YouTube を見たりする時間が増えていることも、幼児の思考力の発達に少なからず影響を与えていると感じる。そこで、幼稚園では、幼児が生きる力の基礎を育む貴重な学びの場として、遊びや生活を通して、考える力や豊かな感性を育むためにどのような教師としての関わりや環境構成が必要かを探っていきたいと考えた。

2 研究の方法と実践

(1) 園および幼児の実態

本園は、小学校、中学校、高校と続く学園通りの中にあり、園舎から望む山々は四季折々の姿を見せ、園庭では様々な昆虫や植物を見つけたり、果物や野菜などの収穫体験をしたりできるなど、1 年を通して自然を楽しむことのできる豊かな環境にある。本年度の園児数は 4 歳児 14 名、5 歳児 14 名の 2 クラス計 28 名で、26 名が午後の預かり保育を利用しており、長時間を園で過ごす幼児が多い。園生活の中では、昨年度からの進級児が中心となり、今年度の入園児の手本となって生活を進めている。入園児も、すぐに園生活に慣れ、楽しみに登園しているが、遊びの中で友達とのトラブルもよく起こっている。また、遊びに持続性がなく、遊びが転々としてしまう幼児や、わからないことやできないことがあると、諦めてしまったりすぐ教師に助けを求めたりする幼児の姿が見られた。



(2) 研究の視点

- ① 遊びや生活を通して、気付きや考える力につながる保育のあり方を事例から考察する。
- ② 幼児の学びにつながるために、どのような援助や環境構成が必要かを探る。

3 実践事例

<事例1>「ジャガイモチャンピオン」

6月上旬（4，5歳児）

園の畑でジャガイモとタマネギの収穫を行った。幼児たちは自分の手で掘ったジャガイモを嬉しそうに大きなたらいに集めて見比べている。



「先生見て！めっちゃ大きいのとれたよ。」と嬉しそうにジャガイモを見せてくるK児。「本当だ。すごく大きいね。」と保育者が言うと、「先生私のも大きいよ。」と周りの幼児たちも土をはらいながら掘ったジャガイモを見せる。「どれが一番大きいんだろう？」とS児が言うので、はかりを準備してみる。「重さを量って、どれが一番大きいかジャガイモチャンピオンを決めよう！」と保育者が提案すると、一人ずつ自分が選んだジャガイモをはかりに乗せ、年長児から一人ずつ量っていく。ジャガイモを上皿に乗せると動く指針や数字に注目する幼児たち。K児の番になり、ジャガイモに乗せるとこれまでより大きく指針が動いた。「Kくんのは300グラム！」と保育者が言うと、「すごーい！いっぱい針が動いた！」と周りの友達も盛り上がる。その後年少児も順番に量ったが、K児を超えるジャガイモはなく、最後に保育者が「今回のジャガイモチャンピオンは…Kくんの300グラム！」と発表すると、「やったー！ぼくのが一番大きい！」と満面の笑みで喜んでいる。

<省察>

○ジャガイモの収穫という体験から、ジャガイモが土の中に実っていることを知ったり、自分で掘って収穫した嬉しさを味わったりすることができた。特に年長児は、昨年度に自分たちが植えた種イモから、芽が出てだんだん茎や葉が大きくなっていくジャガイモの様子を畑によく見に来ていたため、土の中からたくさん出てくるジャガイモに驚き、喜んでいる様子が見られた。初めてジャガイモ掘りをする年少児も多く、自然豊かな環境の中で、畑に実った野菜を友達や保育者と一緒に収穫したという直接体験が幼児の心を大きく動かした。全身で感じ取る自然との触れ合いは、幼児にとって多くの学びにつながるのではないだろうか。

○S児の発言から、はかりを使って重さを量り、どのジャガイモが一番重たいか（大きい）か決めることを提案した。幼児の中では、持ってみたり、並べて見てみたりすることが大きさ比べの方法であるが、視覚的にもわかりやすい道具を使って量る方法を提案することで、より幼児たちの興味を引いたのだと感じた。また、「ジャガイモチャンピオン」という言葉に反応し意欲的に参加している姿から、保育者の言い方や働きかけの大切さを改めて知った。好奇心をもって自分のジャガイモを量りながら、指針が右に大きく動くほど重たいということがわかったり、保育者が発表する友達のジャガイモの重さ（数字の大きさ）に反応したりする姿が見られ、幼児にとって初めての経験からも、様々な新たな学びを得ることができる貴重な機会になったのではないかと感じた。



<事例2>「どうやって数えよう」（5歳児）

ジャガイモの計量を終えた後、たらいに入っている大量のジャガイモを見て、「今年もいっぱいとれたね。全部で何個あるんだろう。」と保育者が言うと、「えー、100個くらい？全然わからん。」と言うK児に、「じゃあ数えてみようよ！」とC児。「でもどうやって数えよう。」とK児は考える。そこで、園庭にあるベンチを一行につなげて並べ、「ここにジャガイモ全部並べてみようか。」と保育者が提案すると、次々とたらいの中からベンチの上にジャガイモを並べていく幼児たち。全部並べ終わると、端っこのジャガイモから「1, 2, 3…」と指を押さえながら数えていく。数が大きくなっても根気強く数え続け、「253, 254, … 255！」と最後まで数え終えた幼児たち。「255個やって。忘れんように覚えとかな！」とC児やK児は最後まで数えられたことを喜んでいた。

<省察>

○「全部で何個あるんだろう。」と保育者が幼児たちに問いかけてみると、様々なことに探求心があり数を数えるのも得意なC児の「数えてみたい」という意欲が湧き、友達にもそれが影響したように思う。膨大な量のジャガイモをただ1個ずつ数えても数え切れないとわかっている年長児たちは、「どうやって数えよう」と考えている様子が見られた。そこで、格子状になっているベンチを集め、一行につなげて並べてみると、そのベンチの格子の一行に一つずつ間を空けてジャガイモを置き、保育者が意図する“並べて数えたら数えやすい”ということを理解しているようだった。幼児が数えやすい方法を保育者が一緒に考え、臨機応変に環境構成することの大切さを改めて考えることができた。

○並べ終わった後、自分たちで声を合わせながら一つずつ数えていった。たくさんの量だったが、根気強く最後まで数える幼児の姿に驚いた。数えている幼児たちの周りにどんどん友達が集まり、みんなでジャガイモを数える様子を見守った。最後まで数え終えたC児やK児たちからは、「255！」と大きな数をみんなで数えきったことの達成感や、喜びが感じられた。この幼児の姿から、最後まで頑張ることの大切さや、友達と一緒にすることの一体感を味わうとともに、今回の“ジャガイモを数える”という遊びが、数字の理解や、どうやって数えるかの思考力にもつながっていると感じた。



4 おわりに

今回の事例を通して、幼児の身近な遊びや経験から、気付きや発見、学びを得る機会が生活の中にたくさんあることがわかった。幼児は、遊びの中で教師や友達と関わり、考えたり試したりする中で様々な出来事や物事から刺激を受け、吸収していつている。家庭では経験できない体験が、幼稚園だからこそできることがあり、その一つ一つの機会を逃さず、幼児の気付きの場、新たな学びの場として教師が環境を設定したり、より深い学びにつながるよう援助や声かけをしたりする大切さに改めて気付いた。そして、幼児が遊びや生活を通して気付いたり考えたりしながら学びに向かうことが、生きる力の基礎を育んでいるのだと感じた。今後も、教師自身が研修や教材研究などに努め、幼児が自ら興味や関心をもって主体的に関わりたくなるような遊びや環境を考えていきながら、日々の保育に取り組んでいきたい。

学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）の実践
～「ひるまっこチャレンジプロジェクト」を通して～

昼間小学校 教諭 逸見香織

1 はじめに

本校では、平成28年度より「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）」の取組を行っている。当初は、教職員が中心となって取り組んでいたが、「児童に主体性をもって取り組んでもらいたい」という願いから、令和元年度より6年生児童が中心となってプロジェクトを進めている。「ひるまっこチャレンジプロジェクト」と題して、学期ごとに1～2つの行動目標を設定し、チャレンジ期間を決めて全校で目標達成に向けて取り組んでいる。今年度は、1学期に「自分から進んであいさつをしよう」「くつ箱のくつやトイレのスリッパをそろえよう」、2学期に「人が話を始めたら、手を止めて目を見て話を聞こう」「授業のあいさつは姿勢を正して最後までしよう」の目標に取り組んだ。「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）」の取組を進める中で、校内のPBS担当として大切にしたことや工夫したこと等を実践記録としてまとめた。

2 実 践

(1) 教職員の共通理解

「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）」で大切なことは、全教職員がチームとなり、同じ目標に向かって取り組むことである。そのため、職員研修を計画的に行い、共通理解を図ることを大切にしたい。

①職員研修

年度初めには重点的に研修の機会を設け、PBSの基本的な考え方の共通理解を図ったり、本校でのこれまでの実践について共有したりした。また、児童の実態について情報交換し、昼間小学校の「3つの大切」や、行動目標を項目ごとにまとめた「がんばりポイント表」の見直しを行った。今年度の「3つの大切」を短い言葉で「きまり・聞く・礼儀」と決め、教職員で同じ目標に向かって取り組んでいくことを確認した。その他にもPBSについての研修の時間を設け、望ましい行動を引き出す工夫について考えたり、ポジティブなフィードバックの方法についてアイデアを出し合ったりした。

ひるまっこ チャレンジ プロジェクト (2022年度)			
がんばりポイント表			
3 つ の 大 切			
	きまりを守ろう きまり	人の話を聞こう 聞く	礼儀正しくしよう れいぎ
授業中 (集会・行事)	・チャイムが鳴り終わるまでに着席し、静かに待とう。 ・時計を見て行動しよう。 ・静かに移動しよう。	・話している人の目を見て話を聞こう。 ・人が話し始めたら、手を止めて静かに話を聞こう。	・学習のあいさつは、最後まで姿勢を正してしよう。 ・友達の発表を聞いて、反応しよう。 ・相手に合った正しい言葉づかいをしよう。
休み時間	・次の時間の学習準備をしてから遊びよう。 ・次の人が使いやすいようにトイレのスリッパをそろえよう。 ・ろうかは苦悶を学ぼう。	・校内放送を静かに聞こう。 ・友達の気持ちを考えながら話を聞こう。	・「ありがとう」や「ごめんね」など大切な言葉を使おう。 ・悩んでいる友達や一人にいる友達に大切な声をかけよう。
登下校時	・登下校のときに、くつ箱のくつをそろえよう。 ・横断歩道は手をあげ、左右確認をしてわたろう。 ・通学路を違って安全に登下校しよう。		・自分から進んで元気よくあいさつをしよう。 ・止まってくれた車に、気持ちをこめて、ていねいにおじぎをしよう。
給食・そうじ	・給食準備は静かに素早くしよう。 ・給食は静かに食べて静かに食べよう。 ・そうじが始まるまでにそうじ場所についておこう。 ・静かに時間いっぱいそうじをしよう。	・給食やそうじの放送を静かに聞こう。	・気持ちをこめて「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをしよう。

令和4年度がんばりポイント表

②取組の振り返り

前年度、取組後の振り返りが不十分であったことが反省点として挙がっていた。そこで今年度は、学期末に教職員に取組についての振り返りカードを記入してもらい、その内容を整理することにした。1学期の成果としては、「具体的な行動が明示されているので、目標を意識して自分から進んで行動する児童が増えた」「児童同士のプラスの声かけが増えた」等があった。課題としては、「チャレンジ期間が終わると目標に対しての意識が薄れている児童が多い」という意見が多かった。

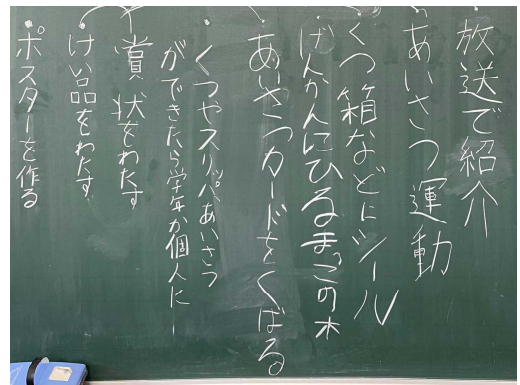


職員研修の様子

(2) 委員会活動での取組

1学期の取組を振り返り、チャレンジ期間中は目標を意識して行動する児童がほとんどだが、チャレンジ期間が終わると意識が薄れ、期間中でできていたことも続けてできていないことが課題となった。そこで、2学期は6年生主体の「ひるまっこチャレンジプロジェクト」と並行して、ハッピー委員会児童が主体となった取組も行うことにした。

2学期最初の委員会活動で児童と話し合い、1学期に取り組んだチャレンジ目標（「自分から進んであいさつをしよう」、「くつ箱のくつやトイレのスリッパをそろえよう」）を継続していくための工夫について考えた。他校での取組も参考にしながら話し合い、「よい姿を放送で紹介する」、「ポスターを作って掲示する」等のアイデアを出し合った。その中から2学期に委員会活動で重点的に取り組むことを決め、「あいさつ運動をして、あいさつができた人にカードを渡す」、「スリッパがそろっていたら、シールを貼ってがんばりが目に見えるようにする」という取組をすることにした。



委員会で出し合ったアイデア



児童が作成したカード

①あいさつ運動

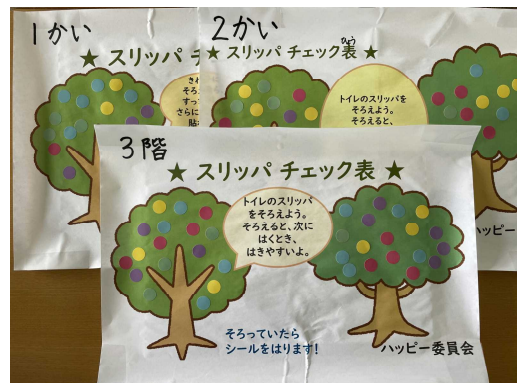
週2日、登校時にハッピー委員会児童があいさつ運動を行い、あいさつを返してくれた児童にカードを渡した。カードはハッピー委員会児童がタブレットPCを活用して作成し、ポジティブなメッセージやイラストを入れ、あいさつが広がるよう工夫した。あいさつ運動を続けていくうちに、あいさつ運動を実施していない日でも、自分から進んであいさつする児童や、大きな声であいさつをする児童が増えた。また、ハッピー委員会の児童だけでなく、他の委員会の児童が自主的にあいさつ運動に参加する姿も見られた。その一方で、「玄関前でできているあいさつを、廊下や教室でもできるようにしてほしい」という新たな課題も見つかった。



あいさつ運動の様子

②スリッパチェック

休み時間や放課後にハッピー委員会の児童が各階のトイレを見回り、スリッパがそろっているかどうかチェックをした。児童のアイデアで、「スリッパがだいたい揃っていればシール1枚、全部揃っていればシール3枚」など、がんばりに応じてシールを貼るようにした。シールの台紙をトイレ入口に掲示し、目標の達成度が目で見て分かりやすくなるように工夫した。自分が使ったスリッパを揃えるよう意識している児童の姿が多く見られた。



スリッパチェック表

3 おわりに

「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（SWPBS）」で大切なことは、教職員や児童がよりよい自分やよりよい学校を目指して意見を出し合い、みんなで同じ目標に向かって取り組むことだと感じた。今後も教職員と連携を取り合ったり、児童の意見も取り入れたりしながら「ひるまっこチャレンジプロジェクト」の取組を進めていきたい。さらに、「ポジティブな行動支援」の考え方を学校行事や授業づくりに生かして実践を積み重ねていきたい。

【参考文献，URL】

○徳島県立総合教育センター「特別支援まなびの広場」<https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/>
ポジティブな行動支援 パンフレット・リーフレット

研究主題

課題の解決に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子どもの育成を目指して
—ごみ処理の学習から、地域の一員としての自覚を養う—

辻小学校 教諭 住友優花

1 はじめに

2015年9月の国連サミットで、持続可能な世界を実現するため、国際目標として「SDGs」が採択された。現在、各国の政府や、企業・団体が、それぞれの分野で積極的に取り組んでいる。日本ではレジ袋が有料化され、ごみの削減が課題として取り上げられている。本校では、環境委員会を中心に古紙回収活動を行っており、家庭から積極的に古紙を持ってくる子どもが多い。また、年に1度ごみゼロ運動を行い、身の回りのごみについて関心をもつ機会もある。しかし、学級では、少し書いただけの紙をすぐに捨てたり、必要以上の材料を使ったりし、物を大切にっていない場面が見られる。これらのことから、自分たちが出すごみを積極的に減らそうという意識はまだ根付いていないと考えられる。

2 研究の目的

持続可能な社会の実現に向け、ごみの削減はわたしたちが地域の一員として取り組まなければならない課題である。本研究では、社会科の単元「ごみはどこへ」を通して、ごみ処理と自分たちの生活が深く関わっていることに気付かせる。また、地域の一員として、ごみ処理に関わる現状や課題、ごみの減量化に向けて自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりできるようにしたい。そして、よりよい社会をつくるために何ができるかを考え続けることができる子どもを育てたい。

3 研究の実践

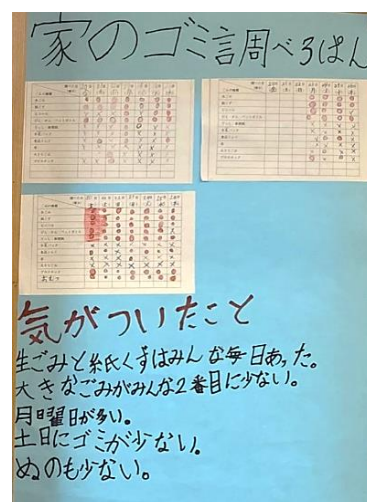
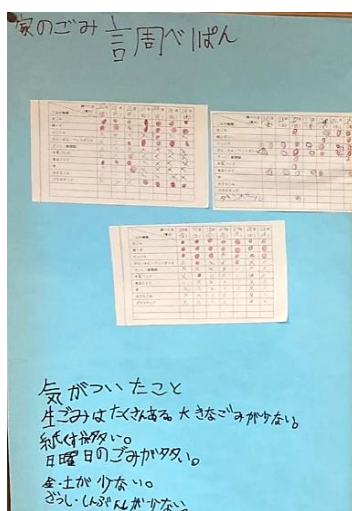
(1) 学校や家庭のごみを調べる

学校では、各教室のごみ箱から、ごみの種類や量を調べた。

「教室によって活動することがちがうから、ごみの種類もちがうのかな。」「特に紙ごみやプラスチックがたくさんある。」「4年教室はごみが多いなあ。」など、気付きが多くあった。

家庭では、学校とは出るごみの種類がちがうことや生ゴミが多いことに気付いていた。また、

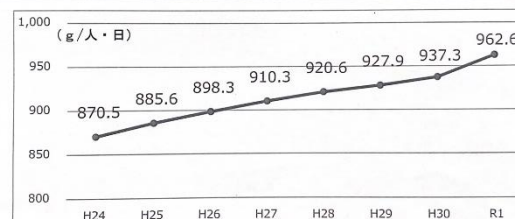
「月曜日はごみを出すけん、その前の日や月曜日の朝くらいにごみが1番多かった。」「ごみって出したらどこへ行くのかな。」という意見があり、次時はごみ処理について調べることになった。



(2) 燃やすごみの処理について調べる

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ごみ処理施設であるみよし広域連合清掃センターへの見学を行うことができず、教員が清掃センターで動画撮影したものを見て学習する形になった。動画を通して、自分たちが出したごみが処理される様子を見ることができ、その仕組みや機械、環境にも配慮したつくりについて学ぶことができた。子どもたちからは、「ごみが粉々になる仕組みがすごい。」「ダイオキシンって聞いたことがある。」「ごみを燃やすときにも環境のことを考えてやっているのは知らなかった。」という意見が出た。また、清掃センターで働く人の苦労や願いも知ることができ、特に「ごみが多いときには朝から夜中の12時までごみを燃やしている」ということに驚いている子どもが多かった。一般的にはごみの量が減少している地域が多い中、三好市では、1人あたりのごみの排出量が増加(図1)しており、ごみ処理にかかる費用が年間約4億円かかることや最終処分場での埋め立てに限界があるなどの課題があることが分かった。

平成24年度～令和元年度 1人あたりのごみ排出量(事業系ごみを含む)



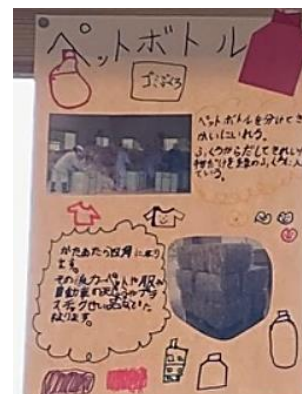
(図1)

(3) リサイクルについて調べる

みよし広域連合リサイクルプラザでリサイクルの様子を見学し、子どもたちは、学校や家庭からでたごみが、資源として新たな製品に生まれかわることを初めて知った。実際に手作業で他の物を取り除いたり、機械で圧縮・梱包したりする場面を見学する中で、「機械でこんなかたまりになるなんてびっくりした。」「でもやっぱりちょこちょこ他の物が混ざってしまっていたから、手作業でせなあかんのやなあ。」という意見があった。特にプラスチック製品やペットボトルの作業場では、汚れが付いていたり、紙が混ざっていたりしたため、正しく分別し、資源として再利用できる物を増やすことの大切さを理解する機会となった。



また、新たに生まれ変わる物についても教えていただいた。学校で古紙回収として集めている段ボールや雑誌・新聞などの紙類がどのような物になるのかを知ることができ、印象に残ったようだった。「3Rに取り組んでほしい」というセンターの方のお話から、「3Rについてくわしく知りたい。」という意見もあった。



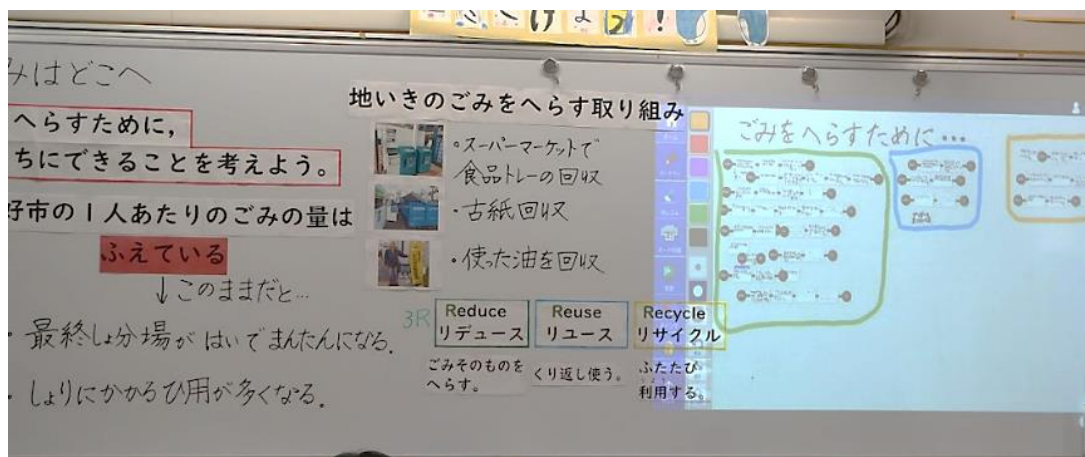
(4) ごみ処理に関わる課題を捉える

これまでに学んだ現在の三好市のごみ処理の仕組みと、昔のごみ処理の仕組みを比較した。子どもたちは、「ごみの量が昔より増えている。」「昔はこんな種類のごみはなかったんやなあ。」「環境や安全のことを考えると、昔より今の方が絶対いい。」など、現在のごみ処理の仕組みのよさを理解していた。一方で、昔よりもごみの量が増え、最終処分場が必要なことやごみの種類が増えたことによる費用の増加についても知り、清掃センターやリサイクルプラザの方のお話と重ね、分別やリサイクルについての意識を高めて行動することが必要であると感じていた。

今日の学習をして昔は金がかからなかったけど今は金がかかってきかないから金を使わずに昔のやり方でいこうと思った。これから3Rをしようと思う。いい方法を考えたい。

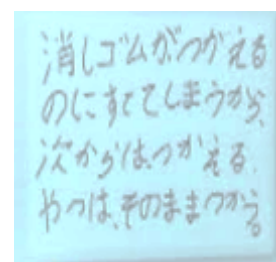
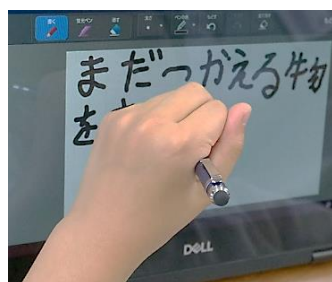
今日学習したことを生活に生かしてごみをへらしていきたいです。ごみの量やごみにかかる費用などが三好市は減っているのでもリサイクルや分別は大変なことがわかりました。

(5) 課題の解決に向けて考える



ごみ処理の課題を捉えた子どもたちからは、分別やリサイクルに取り組みたいという意見が多くあったが、具体的に取る内容を考え、行動することが大切であると感じた。そこで、地域で働く人々の取組を紹介し、地域の一員として、自分たちにできないか、考える時間を設けた。その際、清掃センターやリサイクルプラザの方から教わった3Rを参考

にすることで、具体的に行動を考えられるようにした。意見の発表にはミライシードを活用し、出た意見を仲間分けすることで、実際に取り組むことができそうな方法をたくさん考えることができた。特に多かったのはリデュースで、「消しゴムや紙がまだ使えるのに捨てているから、すぐに捨てない。」「給食を残さない。」「という意見があった。他にも「着ない服を親せきにゆずりたい。」「今まで古紙回収にあまり参加していなかったけど、たくさん古紙を持ってきたい。」「という意見もあり、早速次の日から行動に移す子どもたちがたくさんいた。また、「家族や友達・学校全体に広めたい。」「ポスターを作ったらいいんじゃないか。」「という声から、さらに学習を深めることができた。



4 おわりに

今回の実践を通して、子どもたちは、ごみの処理・削減を自分たちの課題として捉えるとともに、持続可能な社会の実現に向け、自分にできることは何かを深く考え、実行に移すことができていた。何より、当初はごみの削減について考えていなかった子どもたちから、「これはプラやけんこっちのごみ箱やな。」「こんなに古紙を持ってきました！」「お母さんと話して、リサイクル商品を買うようにしたんよ。」などの声が多く聞かれるようになったことを大変うれしく感じた。社会科の学習では社会の諸課題を自分の問題として捉え、考える「公民的資質」の育成が重要である。小さな取組であっても継続し、学んだことを家族や友達、学校全体へ広めたいという子どもたちの思いが積み重なることで、よりよい社会の実現につながると考える。私自身、子どもたちに教える立場としても、改めて、社会の実情を知り、解決策を考え続けることの大切さを実感した。今後も社会科の学習や総合的な学習の時間を中心に、このような授業実践を継続して行っていきたい。

特別支援学級におけるポジティブな行動支援

～学習・生活をプラスのサイクルにするための実践～

三縄小学校 教諭 中瀬 由紀

1 はじめに

本校は、全校児童33名の小規模校で、特別支援学級には6名の児童が在籍している。また、交流学級にも支援を必要としている児童が多い。そのため、教職員間では放課後などを利用して情報の共有や交換が頻繁に行われている。

本学級は知的支援学級で、3名が在籍している。いつも元気で欠席することはほとんどない。しかし、言葉でのコミュニケーションが難しく、自分の考えや思いを的確に伝えることが困難なため、誤解を招きトラブルになってしまうことがある。また、集中力が続かず、「できん」「分からん」「今日はやりたくない」とマイナスの言葉を言うこともよくある。

そこで、これまでに行っていたポジティブな行動支援の取り組みを見直し、児童のやる気を引き出しプラスのサイクルにしていきたいと考えた。

2 児童の課題

1学期は、入学して間もないため学校や学級に慣れることが精いっぱいな児童、マイナスの発言をしたり友達に『チクチク言葉』を言ってしまったりする児童、時間の切り替えができず集中力が続かない児童と個人ごとに課題が見えてきた。

《共通の課題》

- ・集中が続かない。
- ・姿勢が崩れやすい。

《個別の課題》

- ・入退室のあいさつ、問いかけに対する返事が苦手。
- ・苦手なことがあると、床に座ったり教室を出て行ったりする。
- ・友達の嫌がることをしたり言ったりしてしまう。
- ・思い通りにならないと機嫌を損ねたり物にあたったりする。
- ・大勢の前での発表が苦手。

3 実践事例

(1) 環境を整える

○足型の設置をする。教室に入る前に立ち止まってあいさつが意識できるように、入り口に足型を設置する。

○学習の流れを表示する。今から行う学習活動の表示に自分で磁石を移動させることで、学習の見通しをもたせて、休憩まで集中して学習に取り組めるようにする。

○目標の掲示と確認をする。児童が考えた目標を席の近くに掲示し、毎朝目標の確認をする。授業後、児童自身が守れたと判断したら、好きなキャラクターのご褒美シールを貼る。



(2) モデルを示す

○あいさつや返事、正しい姿勢のモデルを見せる。視覚的情報と聴覚的情報とで何度も繰り返し見本を示す。声の大きさや言い方、姿勢の他にも、廊下の歩き方・体育座り・職員室や保健

室への入り方・発表の仕方等、まずは教師がやって見せながら指導する。

○友達の気持ちを理解することが難しい児童に対しては、教師2人でロールプレイをする。『チクチク言葉』を言われたとき、『あったか言葉』を言ってもらったときの感情を表現するなど、気持ちや感情を伝えることで理解を促す。

(3) トライ&エラーを認め、効果的に褒める

チャレンジしたことを認める。児童ができたときは、具体的に「〇〇ができたね」と褒め「これができた」という達成感を感じさせる。また「いいね」「すごいね」など短い言葉で褒めたり、good などハンドサインをしったり効果的に褒める。

(4) 好きなことや得意なことを生かす

苦手な視写の代わりにタイピングしたり、音読を撮影して音読練習の成果を実感させたりする。支援学級で発表練習をして自信をつけ、交流学級や全校集会等で発表できる経験を積み重ねる。

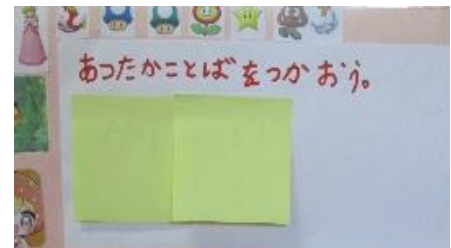
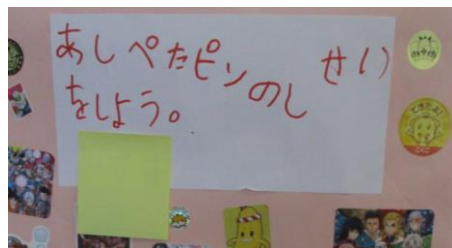
4 結果と考察

○足型を設置し見本を示したことで、黙って教室に入ってきたりあいさつをしても声が小さかったりしていた児童が、少しずつ大きな声であいさつができるようになってきた。できたら褒めることを続けたことにより、あいさつや返事が元気よくできるようになり、交流学級でも「行きます」「ただいま」と言えるようになっていく。また、保健室や職員室に行くときにも、何を言えば良いかを考えたり今の自分の気持ちを少しずつ伝えたりできるようになっている。

○学習の流れを意識することで、「次で休憩」「あと1つで休憩。がんばるぞ!」と3人とも、学習に対しての見通しをもてるようになり、以前より集中して学習できるようになった。苦手な算数でも集中力が増している。

○昨年度は児童が立てた目標が高く、私の見取りが甘かったため、目標を考え直させることができず、ご褒美シールが集められなかった。そこで今年度は達成できそうな目標を児童に決めさせて、それに向けて一

人一人頑張らせることにした。『あったか言葉をつかおう』『足ペタぴんの姿勢をしよう』『あいさつや返事をしよう』と、そ



れぞれ自分の目標を書き、掲示した。また、友達の目標を見て「ぼくもあったか言葉使おう」「ぼくも足ペタぴんします」と他の児童にも良い影響があった。シールもたくさん集められ、次も頑張ろうという前向きな姿勢が見られた。

○目標の掲示と確認やロールプレイで「ありがとう」「だいじょうぶ?」「いけるで?」などの『あったか言葉』がたくさん使えるようになった。



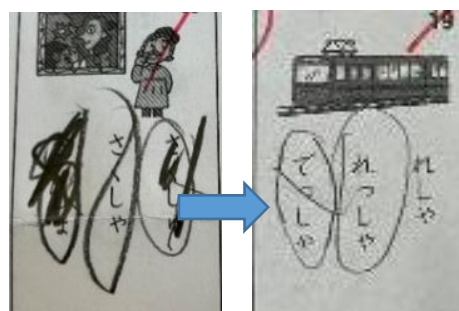
○『足ペタぴん』を合い言葉に、良い姿勢の見本を見せたことで、正しい姿勢で学習したり食事をしたりすることができた。姿勢を保持するための体幹トレ

ーニングや『やる気スイッチ体操』を行ったことも効果的だった。

○トライ&エラーを認め、効果的に褒めたことで、苦手な運動に対しては、床に座ってしようとしなかった児童がチャレンジできるようになった。まず指導者が手本を見せ、できる児童がやって見せる。「ぶつかってもいけるよ」「ハードルの前まで来られたなあ、すごいよ」と声をかけ、手を引くとミニハードルを越えることができた。その後は、体幹トレーニングのジャンプも1人でできた。このとき、みんなが大きなリアクションで喜んだことが児童の笑顔と自信に繋がりととも効果的だった。



○トライしたことを褒め続けると、以前は間違っただけに対してイライラし、鉛筆でプリントをグシャグシャにしていた児童も「正解はこっちだった」と間違いを認めることができた。



○人前での発表が極端に苦手である児童は、書字を嫌い、文章に書くことも苦手である。そこで、得意なタイピングで発表内容を入力し、発表練習を録画して一緒に確かめるようにした。上手にできたところを褒めることで、自信をつけて全校児童の前で発表することができた。自信がついてくると、友達にも気を配ったり、すべきことを自分で選び決めたりとプラスの変化がたくさんあった。



(友達に作業を教える)



(苦手な運動に取り組む)



(整頓された体育用具)

○『あったか言葉』がたくさん使えるようになった一方で、自分が責められたと感じると、友達に対して突発的に『チクチク言葉』を使ってしまう児童もいる。現段階では、友達関係が壊れないように「してはいけない」言動に対しては、「してはいけない」「言ったら相手が悲しい」ことを理解させ、友達に謝るように指導している。どうしても突発的に出てしまう「してはいけない」言動を、どのようにポジティブに支援していけば良いかが課題である。また、学習中の課題から課題への切り替えはできるようになってきているが、休み時間に気分が上がるとスムーズに授業に入れない児童がいることも今後の課題である。導入の手立てについても取り組んでいきたい。

5 おわりに

特別支援学級を担当してもうすぐ2年になる。今回、取組を見直すことで児童一人一人の教育的ニーズを把握することがとても重要であることを再認識した。少しずつではあるが、自主性も見られプラスのサイクルになり始めているこの好機を逃さず、児童の望ましい行動を引き出すための環境作りや、やる気を起こさせる教材作りをして、児童自らがプラスのサイクルを作っていけるよう今後さらに研鑽を積んでいきたい。

研究主題 アウトメディアから始める 児童が主体的に改善していく生活習慣
三好市山城・西祖谷・東祖谷地区小学校養護部会

1 はじめに

令和3年度より山城・西祖谷・東祖谷地区で共同研究を始め、生活習慣などの調査を行った結果、共通の課題として「メディアの長時間利用」や「就寝時刻の遅延」がみられ、更に「朝食の欠食」「朝、トイレへ行く習慣がない」「多量の間食」があげられた。生活習慣の改善を図る取組は各校で行っていたが、小規模校が故に学び合いの限界や自他の健康課題に気づきにくい面があると感じていたため、共同の取組を行うことにした。

2 研究の目的

アウトメディアを中心とした取組や交流を山城・西祖谷・東祖谷地区で連携して行うことで、メディアコントロール力を習得させ、主体的に生活習慣を改善できるようにする。

3 研究の方法と実践

山城・西祖谷・東祖谷地区の小学校全校児童を対象にアウトメディアを中心とした共同の取組やオンラインと対面を合わせた交流を行い、学び合いの充実を図った。年2回の生活に関する調査結果、アウトメディアチャレンジ週間で児童が感じた生活や身体の変化、保護者の意見や感想などで評価した。

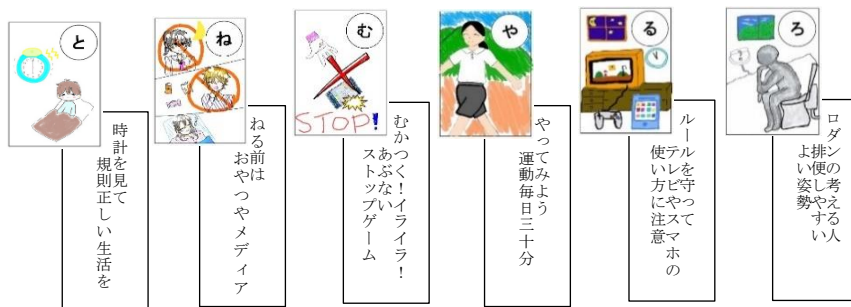
(1) 生活に関する調査

令和3年度は山城・西祖谷・東祖谷の小学校5校の全校児童92名を対象に5月と12月に行い、共通項目と実施時期を揃え、メディアの使用時間や使用目的、生活習慣の傾向を調査した。令和4年度は山城・西祖谷・東祖谷の小学校4校の全校児童77名を対象に、令和3年度と同時期に行う予定である。この調査で生活の課題の発見や改善がみられたかの評価を行っている。

(2) 共通の取組実践

①健康かるた～生活習慣 ver. ～の作成と実践

令和3年度の夏休みから12月までを制作期間とし、5校の4年生～6年生が一人1組の読み札と絵札を作成した。45音は事前に養護部会で各校へ割り振っていた。朝の活動時のミニ保健指導や中学生が小学生と連携して行った委員会活動での保健発表【写真1】などから、児童は読み札を考え、それに応じた絵札をタブレットで作成し、PDFで保存した。【資料1】完成した健康かるたは、行事や集会で行ったり、掲示物など啓発活動に用いたりして、生活習慣改善への意欲付けを図るために様々な形で活用している。【写真2】



【資料1】健康かるた～生活習慣 ver. ～



【写真1】小・中学校連携保健集会の様子



【写真2】健康かるたの活用

②アウトメディアチャレンジ週間【資料2】

令和3年10月から令和4年2月までの間、毎月1週間行った。児童が、無理なくアウトメディアを生活の中へ取り入れ、継続して取り組めることに重点を置いた取組にしたいと考え、従来の1つのレベルを「できた」「できなかった」で評価するのではなく、1週間を通した目標を立て、8段階のレベルから、その日の生活に合わせたレベルを自分で選び実践するものにした。最終日に「できた」「もう少し頑張りたい」「できなかった」から児童が評価し、アウトメディアを行ったことで感じた体や生活の変化を選択肢から選ぶ形式にしている。児童が「選ぶ楽しさ」や「達成できた嬉しさ」を実感できるよう工夫し、更に保護者からも意見をもらえる項目を作り、多方面から評価されるようにした。

事前指導では、メディアに関する知識や使用方法以外にも、児童からの疑問点を予想し養護教諭間で返答内容を統一したり、「習い事」や「見たいテレビがある日」など具体的な1週間のモデルケースを挙げたりして、より丁寧に行った。

令和4年度は実施時期を年6回のアウトメディア週間として、継続して行っている。

(3) オンラインと対面を合わせた交流の充実

①養護教諭が他校の児童へ向けて保健教育を実践

養護教諭未配置の小学校へ養護助教諭が出向いて、朝の活動を使って保健指導を行ったり【写真3】、オンライン会議システムを活用して宿泊活動前の保健指導を養護教諭2人で行ったりすることで、保健教育の充実を図った。合同修学旅行だったこともあり、事前に他校の児童とコミュニケーションを取ることで、修学旅行の児童管理に役立てることができた。

②他校の児童対児童で保健教育を実践

オンラインで合同保健集会を実施したり【写真4】、合同マラソン大会のレクリエーションで児童が作成した健康かるたをしたりして【写真5】、児童の交流と学び合いの充実を図った。児童の感想からも行動変容を起こそうとする前向きな感想がみられた。【資料3】

- ・自分の発表など、自信を持って発表することができた。今日学んだことの中で、自分ができていないことをチャレンジして健康な生活を送っていききたいと思う。
- ・今日学んだ『どうしてこうしないといけないうか』ということを活かして生活していききたい。次は、食べもの・運動など、一つにしぼって、くわしく調べて、まとめて、各学校で発表するという交流の仕方でもしてみたい。
- ・ふだんしていることを、より気をつけていかなければいけないと思った。初めて知ったこともあったので、これからはそのことも実行して健康的な生活を送ろうと思った。
- ・とくに目の体そうがよかった。ゲームやメディアを使った後休けいしながらやりたい。

など

【資料3】児童の感想

アウトメディアチャレンジ週間のやり方	
1	具体的な目標を決めよう。詳しく決めておくことでチャレンジしやすくなります。 ＜例＞1週間のうち5日アウトメディアをする・レベル6を2日する レベル4を毎日して、わる側は読書をする など
2	毎日、どのレベルができたか書きこみます。できた一番高いレベルの数字を書きましよう。 できなかった日は×を書いてください。
3	アウトメディア期間の最後の日に目標ができたかどうかを確認しよう。 チャレンジ週間を通して生活や気持ちなどにあてはまるものに○を書きましよう。
4	お家の入に家で様子や自分がチャレンジしたことについて一言書いてもらいよう。 お家の入とメディアを使うときのルールなどを話し合えよう。

アウトメディアチャレンジレベル	
レベル1	メディアを1時間使ったら15分休む
レベル2	メディアを1時間使ったら30分休む
レベル3	夕食の時間だけノーメディア
レベル4	ねる1時間前からノーメディア
レベル5	タブレット学習以外のメディアは1日1時間まで
レベル6	タブレット学習以外のメディアは1日30分まで
レベル7	夕食の時間だけノーメディア
レベル8	タブレット学習以外のノーメディア

① 目標 ()	
10月	18日(月) 19日(火) 20日(水) 21日(木) 22日(金) 23日(土) 24日(日)
2.チャレンジして できた最高レベル	
3.目標はできましたか	できた ・ もう少しがんばりたい ・ できなかった
4.チャレンジして かわったことに ○をつけましよう いつついてもいいよ	寝ねがでるようになった ・ よくねむれた ・ スッキリおきれるようになった イライラしなくなった ・ 自分つかなくなった ・ 勉強する時間がふえた 読書の時間がふえた ・ 運動する時間がふえた ・ 集中力がアップした お手伝いができた ・ 家族と話す時間がふえた その他()
5.お家の方から一言	

【資料2】アウトメディアチャレンジ週間用紙



【写真3】養護教諭未配置校での保健指導



【写真4】オンライン合同保健集会



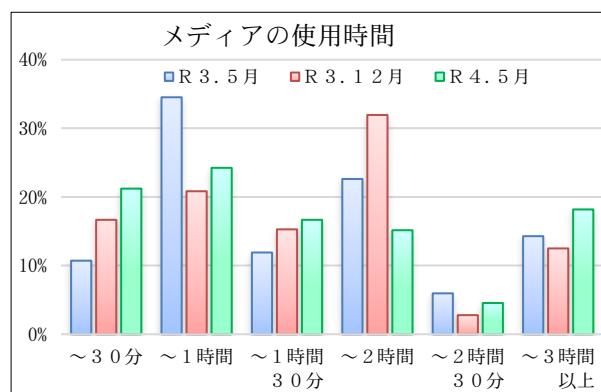
【写真5】合同レクリエーション

4 結果

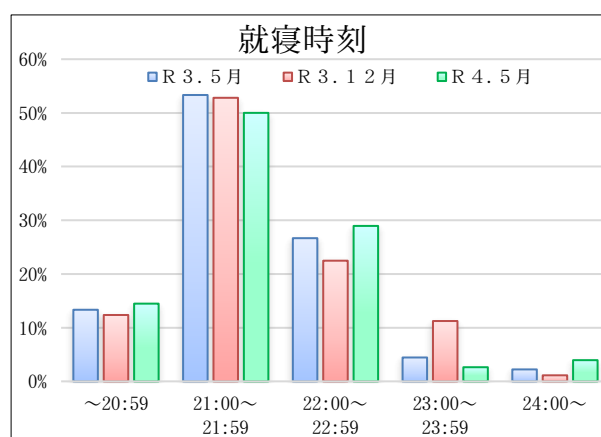
令和3年5月から令和4年5月で、生活に関する調査の結果を比較すると「家での過ごし方」の項目では「テレビを含むメディアを使用する」が減少傾向にあった。しかし、この内「平日2時間以上のメディア使用者」は令和3年12月には5.0ポイント減少したが、令和4年度5月には増加していた。【資料4】

就寝時刻については、23時以降の就寝者が令和3年12月には5.7ポイント増加したが、令和4年5月には減少していた。【資料5】

次に、アウトメディアチャレンジ週間の結果から、令和3年度10月と2月の「児童たちが感じた生活や心身の変化」を比較すると、すべての項目で改善がみられ、変化を感じていない児童はいなかった。アウトメディアチャレンジ週間の取組は保護者の協力が不可欠だったが、家庭内でもメディア使用に不安を持っていたようで保護者からも肯定的な意見が多かった。令和4年度も同様の変化が現れている。



【資料4】メディア使用時間



【資料5】就寝時刻

5 考察

アウトメディアの取組では、児童自身が無理なく取り組める目標を設定し、実行・評価することによって、達成感を味わうことができたのではないかと思います。その成果を担任や家族から評価してもらうことにより、アウトメディアに意欲的に取り組む姿勢がみられ、メディアコントロール力の習得に繋がっている。そして、他校と連携した取組や定期的な交流を通し、共に学び・考え・行動する体験を重ねられたことで、自身の生活習慣の改善を主体的に実践する意欲がより高まったと考えられる。

しかし、アウトメディアの意識付けができ、それが心身の健康とメディア使用以外の充実した時間の過ごし方に繋がりがつつあるが、まだ生活習慣の改善には至っていない。メディアコントロール力の習得と生活習慣の改善を目指した指導を相互に行う必要があると感じた。

6 おわりに

山城・西祖谷・東祖谷地区で共同の取組や児童同士の交流を通じて、学び合う楽しみが得られたことで、児童の意欲の向上がみられた。そして、自己の考えや興味・関心を広げ、深めることができるようになってきた。

アウトメディアの取組は、中学校からも関心を持ってもらうことができ、令和3年度から連携して行っている。今年度は山城・西祖谷・東祖谷地区の小・中学校で同時期に行うなど、更に一貫した取組へ発展させることができたことは大きな成果である。

メディアコントロール力は児童が習得すべき能力であると感じている。アウトメディアの意識付けから良質な睡眠をはじめとする生活習慣の改善へ繋げ、児童が主体的に生活習慣を改善していくよう、今後も研究を継続して行く。

研究主題 科学的な思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり
～「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業実践を通して～

三加茂中学校 教諭 佐藤 真也

1 はじめに

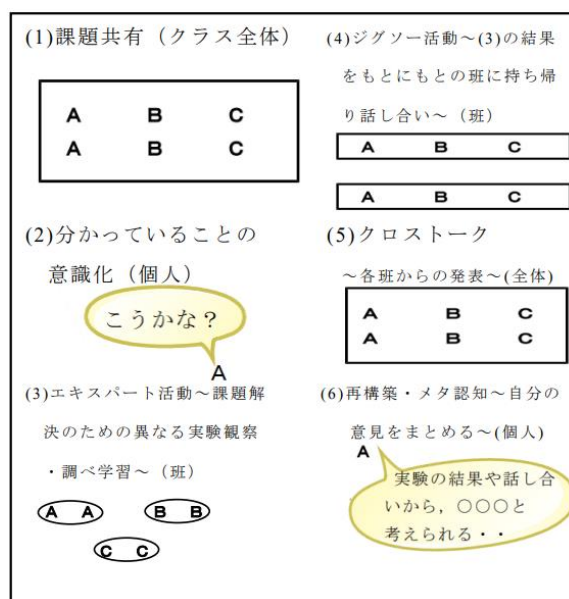
三好郡市の8中学校は徳島県西部に位置し、広域な山林に囲まれた自然豊かな地域にある小中規模校である。そこで、環境教育、情報教育、観察・実験の仕方、言語活動の充実を図る学習などの指導法について共同で研鑽を積んできた。

令和2年度からは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導法を研究している。本校では、「主体的に学習し、考えや思いを伝え合い、深めあうことのできる学習集団の形成」を目標に研修及び授業改善を進めてきた。しかし、実験や観察、考察などの班活動においては、常に決まった生徒の考えが班の学びとして取り上げられる実態があった。結果、すべての生徒が主体的に実験や観察に取り組み、学びを深めているとは言えないという課題があった。

そこで、すべての生徒が主体的に学習し、「科学的な思考力・判断力・表現力」を育成できる学びの場面を設定できる協働学習の1つである「知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）」を取り入れた授業について研究することとした。

2 研究内容

「ジグソー法」とは、東京大学 CoREF が開発・推奨している授業型である。まず、すべての生徒に役割が割り当てられる。そのため、担当課題を解決するために、知識や技能を習得しなければならない責任が生まれる。よって、主体的に実験や観察・調べ学習に取り組むことができる状況ができる。さらに、事象の共通点や相違点などについて話し合うことで、課題にせまっていく考察の段階では、対話的で深い学びが実現できる。以上のような学習の過程を通して「科学的な思考力・判断力・表現力」を育てていけると考えた。三好郡市では、通常実験班（Ⅰ）で役割分担をし、エキスパート活動班（Ⅱ）で行った実験結果を基に、再び通常班（Ⅰ）に戻って学びを共有する授業型を基本としている。さらに学習ツールとして、一人1台タブレットを活用して、実験結果を動画や画像などにまとめて、学びの共有が円滑に行えるような工夫もしている。



【これまでの実践による課題】

- (1) 各エキスパート活動の難易度の調整
- (2) 授業欠席者などへの配慮（動画の活用など）

上記の課題を解決する授業づくりを研究した。以下はその一例である。

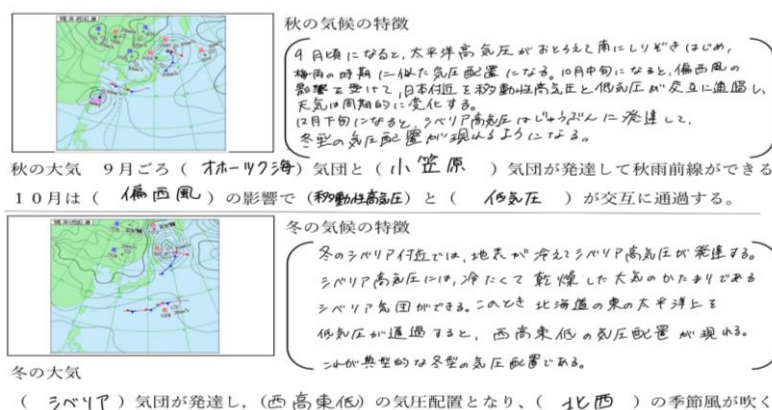
3 研究の実際

(1) 「日本の四季と天気」での実践

この単元は、生徒にも身近な自然現象であり、タブレットを活用することで、多様な気象要素や衛星写真などの情報を、誰でも容易に収集でき、全員が一定の成果を得ることができるという利点がある。そのため、生徒の学習意欲も高まる。

また、高気圧の盛衰に伴う日本周辺の大気の様子と四季との

関連を考えることによって、1年間の天気変化へと理解を深めることもできる。さらに、エキスパート活動を「春・梅雨」「夏・台風」「秋・冬」の3つのグループに分けることで、難易度の偏りについても解消でき、他の季節と比較することで思考や理解を一層深めていくことができ、生徒の達成感も高い。



(2) 「化学変化とイオン」での実践

この単元で課題の1つとなるのは、実際には見ることのできないイオンの電気的な性質について、実験を通していかに理解させるのかということである。そこで、水溶液中のイオンの動きや電気的な性質を見いだ

すことが可能である「塩化銅の電気分解」「塩化銅の電気泳動」と知識の概念化がしやすい「塩酸の電気分解」の3つの実験を行うエキスパート活動を計画した。

どの実験も難易度や所要時間が同程度で同時に行う実験としては適当である。さらに、各実験の学びを共有する場面で、共通して起こっている事象から、共通点や相違点を考えることで、イオンの電気的な性質を具体的につかむことが容易となり、科学的な思考を深めることができる。

A 塩化銅水溶液の電気分解



B 塩化銅水溶液の電気泳動



C 塩酸の電気分解



(3) 上記の2つの実践に共通した取組

実験や授業の前時とのつながりや実験時の欠席者への配慮に関しても、タブレットのアプリ「metamojiclassroom」を活用して実験動画を撮影し、レポートを作成することで、振り返りもしやすくなり、次時における説明も容易となった。さらに、実験の結果についての考察やまとめでは、班員の質問にも、担当者が責任を持って応答している姿を見ると、これまで学習に後ろ向きであった生徒の積極性が増し、理解度も深まっているように感じた。



4 成果と課題

成果としては「主体的・対話的な学習」実践が可能になったということである。これは、授業前後のアンケートで①「自分の意見を出ることができる」②「班の他のメンバーの意見を聞くことができる」の質問に対して「当てはまる」と答えた生徒が、①は78%→89%、②は39%→73%と向上していることから言え、生徒同士で活発な意見交換や学び合いができていたと推察できる。また、「話し合いや学習活動において協力できたか」などの項目においても、自己評価が向上していた。さらに、授業後の感想については「他の人の意見を聞いて自分の考えていたことをより深く、楽しく考察することができた。」「役割を果たすために、他人まかせにせずに理解できるまで粘り強く学べるようになった。」「話し合う時間が多くとれた。」などの意見が多数寄せられた。以上により、本研究の目的でもあった全ての生徒に「科学的な思考力・判断力・表現力」を育成することにつながったと捉えている。また、タブレットを用いることにより学習の過程をポートフォリオ化できるようになり、評価と指導の一体化の面でも成果があった。

課題としては、各々の生徒の習熟度を考えた班構成の配慮や、担当したエキスパート活動以外の知識・理解の補充が必要である点などがあげられる。

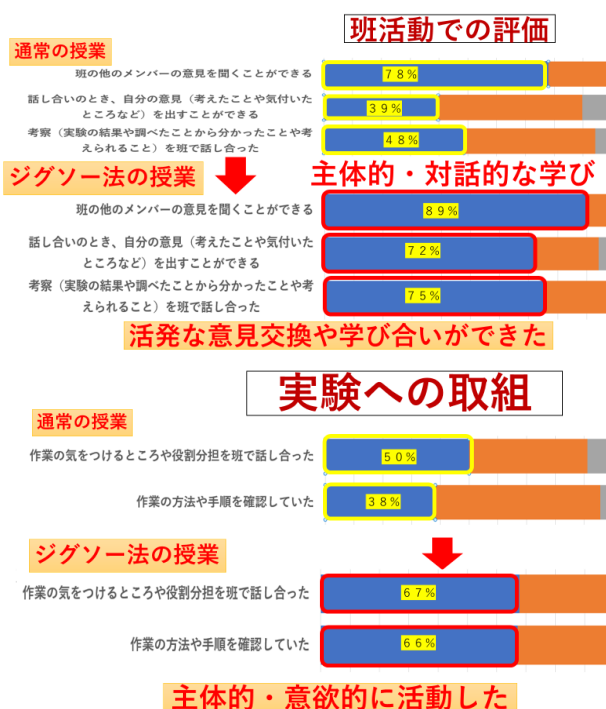
5 おわりに

今回の実践で生徒が主体的に学ぶ授業づくりを行う上で大切なことは、生徒一人一人が責任を持ち学びたい、調べたいと思わせる仕掛けを作ることこそが大切であるということである。その仕掛けの一つとしてジグソー法を用いることは非常に有効であるということも同時に実感できた。

また本研究に協力していただいた先生方や、研究会に参加しアドバイスをいただいた県内外の先生方と情報共有を行う中で、生徒一人一人が学ぶ楽しさを実感し自ら課題を解決するために、実験や調べ学習を行う仕掛けは他にもたくさんあることも助言いただいた。生徒が生き生きと学ぶ姿をさらに増やすために、科学的な思考力・判断力・表現力を育成できる実践をこれからも進めていきたい。

(参考文献)

協調学習授業デザインハンドブック(第1～3版)―知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり―
東京大学 CoREF



研究主題

変化する時代の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方
～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～

三好市立井川中学校 教諭 田口 智也

1 はじめに

令和2年4月、教育界では教職員の超過勤務時間についての課題があげられ、コロナ禍の始まりのときであり、教育課程さえ完全に実施できるかわからない状況であった。生徒や教職員の健康や安全を維持するとともに、学校目標である「知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育むとともに『生きる力』を身につけた生徒の育成」の具体化について、これを機会に学校のあり方や取り巻く人々の教育活動への意識改革、生徒や教職員が新しい風を感じる学校運営をすすめたいと考えた。

2 研究の目的

学校長が在職の教職員やPTA役員との話を基に、SWOT分析を行った。その結果、競争優位性が発揮しやすい「機会」×「強み」＝「積極戦略」の学校運営が理想とでた。この施策が成功すると、ポジティブな影響の波及や生徒の自主性や創造性が成長できる。そこで、時代にあった持続可能な学校運営を目指し、優先度の高いものから改革を進めることにした。

3 研究の概要

次の2つの改革を基に研究を進めることにした。

(1) 教育活動の改革

①キャリア教育を支援する教育の創造

～キャリア教育的視点で取り組む体験活動の実践～

②自他の人権を共存する心の育成

(2) 教師の働き方改革とPTA活動の改革

4 研究の実践

(1) 登校カバンの改革

従来、白カバンで登校していた。早くから、教科書等の重たい荷物を片方の肩に荷重がかかるのは健康上良くないと言われてきたが、そのままにされていた。そこでSWOT分析の結果である小規模校の特性を活かした積極戦略をとり、地域に先駆けて登下校の白カバン廃止とデイパックの採用を決めた。業者との連携で商店の在庫を引き取ってもらい、令和3年4月より令和5年3月までを移行期間とした。その間は令和2年度入学生までは、白カバン以外に家庭で持っている黒・紺が基調のデイパックも可とした。デイパックはタブレットを安全に持ち帰ることができるスペースを備えている。

(2) 体育祭の春開催

従来は、あすなろ祭として9月に文化祭の後の日曜日に開催であった。8月下旬から、愛校作業（小・中）、あすなろ祭（中）、体育祭（中）、運動会（小）と日曜日ごとのPTAが絡んだ行

事と部活動の新人大会とで保護者には休める間もない方もおり、負担が大きかった。そこで、春開催を提案し、熱中症予防と保護者の負担の分散化を目指した。少人数であり、出ずっぱりの生徒の負担軽減のため午前中開催とした。また赤・青の2チーム対抗戦とし、チームで作戦を練りながら競技を楽しめるようにした。異学年でチームを組み、協働することで絆を深め先輩の姿から自らの役割を認識し、1年後に自分が必要なスキルに気付き、キャリア形成を進めている。

(3) あすなろ祭

令和3年度より体育祭が分離され、文化祭単独の行事となった。文化祭では、合唱コンクールが開催されていたが、廃止し生徒企画の催しを実施している。ダンス発表会(R2)、井川中王(R3)とマンネリ化を避けている。文化祭の企画・運営は生徒会本部役員が中心となっているが、かざり隊、おたすけ隊、もりあげ隊、たべ隊が組織され、全生徒がどこかの隊に所属し、運営を支えている。縦割り班であるため、先輩の姿を見て自分たちが上級者になったときに必要なスキルを肌で感じキャリアアップを図っている。



(4) 辻町探検

辻地区の歴史や文化に触れるとともに、地域の先輩の思いを受け止め、伝統を引き継ぐ者として、地域社会の創り手となることを目指した教育活動である。令和3年度は地域ボランティアと地元ボランティアガイド達と交流し、歴史・文化・建築物の説明や辻町や生徒達への思いを伝えてもらっている。生徒達はタブレットを利用し、ボランティアの語りを動画で建築物や史跡を写真で撮影し記録する。教室ではプレゼンを作成し、情報共有する。辻町の一員として地元に根ざし、地域や社会の創り手となることも多様な生き方の1つであると感じられる貴重なキャリア体験となっている。



(5) 人権啓発活動

人権意見発表会・意見交換会では、各学年の代表が生徒全体と保護者に人権作文を発表し、その内容について感じたことや考えたことなど、異学年の意見を聞く機会となっており、幅広い意見を知ることや運営する先輩達の姿を見て、自身の話し合い活動でのスキルアップの契機となっている。

「人権講演会」は、差別の現実から学ぶことを重視し、講師の体験したことや生き様を語っていただくことで、人権意識を高めることを目的としている。令和2年度は、「私が歩んだ道」中原サヲ江さん、3年度は「ありのままの自分で生きる～性的マイノリティーの人権～」徳山富子さん、4年度は「あることをないことにしない」大湾昇さんに講演をしていただいている。その成果として、体育館シューズの色が、男子は青、女子は赤と決められていたのが、生徒会で話し合われ、どちらを選択してもよいとなった。個人情報流出を防ぐ意識が生まれ、名札も学校内だけでの着用となった。



（６）PTA 活動の改革

少子化による学校規模の縮小に伴い、教職員数や PTA 役員数が減少している。しかし、PTA 活動は従来のまま、組織・運営されているため、教職員、保護者共に負担が大きくなっている。そこで「教職員の働き方改革」と「PTA 活動の負担軽減」をはかるため、ワークライフバランスについて真剣に考えていただき、PTA 役員会で了承をいただいたので、令和３年度より本格実施をした。まず PTA 役員が、各地区２名から、辻・井内地区を合併し人数を減らした。次に PTA の各部会を、行事の日の昼間（日曜日）に実施することにした。教職員は勤務時間内の会となり、日曜日なので振替日が担保できる。保護者も学校に集まる機会が１回にまとまり、負担の軽減につながった。その他の具体的な内容を下にあげる。

４月平日・・・・・・家庭訪問の希望制（校内面談も可、無しも OK）

７月第１日曜・・・・人権意見発表会・意見交換会と PTA 広報部会

８月最終日曜・・・・PTA 奉仕作業（生徒登校日）と PTA 母の部会

９月第２日曜・・・・あすなろ祭と第２回学校運営委員会（含保護者）

１１月最終日曜・・・・参観日と PTA 本部役員会

（７）福祉体験

社会福祉協議会による車イス・高齢者疑似体験、手話ボランティアによる手話コーラス「ふるさと」の体験、みよし地域包括支援センターによる認知症サポーター養成講座を、少人数のグループでローテーションし、すべて体験する。高齢化社会で必要不可欠な仕事を体験し、聞くことにより社会的弱者に寄り添える心の育成をねらいとしている。特に車イス体験では、介助者の立場を体験することで、「相手の思いを知り行動すること」が介護では大切であると知る機会につながった。プルタブ集めによる車イスの贈呈の意義を感じる良い機会となっている。令和４年度に１０台目の車イスを社会福祉協議会へ寄付した。



（８）様々な体験活動

ラフティング体験、スキー体験のような自然と触れ合うアクティビティーやマナー講習、林業体験、職場体験学習等の地域でのビジネス体験や、敬寿荘との交流や奉仕作業などのボランティア的な体験もある。いずれも協働して体験活動をし、事後指導で共有することで身につけさせたい力の育成を目指している。

５ 結果と考察

学校の取組や投げかけに保護者が反応し、改革が進んだおかげか、生徒・保護者・教職員に心のゆとりができ、教育活動への理解が深まったと感じている。２つの改革を通して、学校にも家庭にもゆとりが生じ、生徒にあたる時間ができた点と、どのような力をつけさせるかが共有できることで、それぞれの活動の目的が保護者と共有できた点も大きかった。保護者や学校運営協議会委員からは、過大な評価をいただき、ありがたいことだが、課題もまだまだ多い。不登校生徒や特別な支援が必要な生徒への対応など、課題も残している。今後も井川中学校の強みを活かして変化を恐れず、ポジティブに活動できる学校としていきたい。

令和4年度 教育研修・研究事業報告

1 研究主題

「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動」

2 事業

(1) 調査研究

- ア 教育課程の研究
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 地域の教育力を生かした教育活動の研究
- オ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- カ 各種研究会への参加と研究物の収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

(2) 各種研究会及び研修会の開催・共催

- ア 教育研究推進協議会・教育研究所協力委員会
6月 1日（水）
- イ 情報教育研修会（小教研情報教育部会と共催）
夏期研修会（新型コロナウイルス感染症のため中止）
10月17日（月） コンピュータ作品審査等（三好教育センター）
- ウ 複式教育研修会（小教研へき地・複式部会と共催）
10月26日（水） 現場研修会（馬路小学校）
- エ 人権教育研究会（三好郡市学校人権教育研究大会後援）
文書発表 就学前分科会（みかも保育園・三庄幼稚園）
11月 9日（水） 小学校分科会（三庄小学校）
11月 1日（火） 中学校分科会（井川中学校）
- オ 新任管理職研修 参加者 3名
5月17日（火） 服務・勤務態様等事務関係について
講師 三好郡市内事務室長3名
- カ 学校運営研修会（教頭・中堅教員研修会） 参加者19名
開催日と講師
6月15日（水） 講義1 田岡 茂樹（三好教育研究所長）
22日（水） 講義2 西尾千代子，宮内 美和，柏尾 美恵
（三好郡市内事務室長）
7月 1日（金） 講義3 豊田 佳男（芝生小学校長）
6日（水） 講義4 窪田 和弘（池田中学校長）
14日（木） 講義5 野口 幸司（徳島新聞NIEコーディネーター）
23日（土） 講義6 伊丹 賢治（四国大学准教授）
オ～カ「三好教育振興協議会」との連携による事業

(3) 研究委嘱，研究協力校（園）への指導・助成

- ア 研究発表校

加茂小学校・三好教育研究所

イ 研究協力校・園（令和５年度発表校）

馬路小学校・井川中学校

ウ 委嘱研究員

幼稚園 3区 池田幼稚園 赤堀 奏子 主任教諭

小学校 1区 昼間小学校 逸見 香織 教諭

2区 辻小学校 住友 優花 教諭

3区 三縄小学校 中瀬 由紀 教諭

4区 養護部会

中学校 1区 三加茂中学校 佐藤 真也 教諭

2区 井川中学校 田口 智也 教諭

(4) 各研究会，団体等との協力

ア 三好教育会

イ 三好郡・市小学校教育研究会，三好郡・市中学校教育研究会

ウ 三好郡・市学校人権教育研究協議会

エ 三好郡・市各幼稚園・小学校・中学校

オ 中・四国教育研究所連盟

カ その他教育関係諸機関

3 研究成果の発表及びその普及

(1) 三好教育研究発表会

日時 令和４年８月１８日（木） １３：３０～１６：１５

会場 ハイブリッド開催（三好教育センター，三好郡市各学校園 他）

○研究発表

・加茂小学校 研究主題

ポジティブな行動支援の手法を活かした授業改善の取組

～「わかった」を「できた」にする算数科の授業づくり～

発表者 久原 有里 教諭， 森長 拓哉 教諭

・三好教育研究所 研究主題

低学年におけるひらがな，カタカナの効果的な指導

発表者 上野 三千代 研究員

○講演

演題 「GIGA端末がもたらす他律から自律への転換」

～子供も教師も自ら主役となって大胆な変革を～

講師 中川 斉史 氏（文科省 ICT 活用教育アドバイザー，上板町高志小学校校長）

(2) 研究紀要（第６３集）の発行と研究所報（第１０３号）の発行

各学校・園，各研究機関に送付

(3) ホームページ等による広報活動

(4) 研究員による研究成果のまとめと報告（県教育委員会へ提出）

(5) 三好教育振興協議会の事務

各種調査・整理，会議の運営など

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

幼稚園・小学校

年度	幼稚園	小学校				
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
H1	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼) 斎藤光子(三野幼)	藤本政義(王地小) 坂野町子(三庄小)	天竹勉(昼間小) 前川順子(辻小)	吉岡弘恵(池田小) 久保徹(箸蔵小)	森勝正(河内小) 小笠健二(大野小)	森本義博(櫟生小) 和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼) 横田嘉代子(昼間幼)	小笠松美(王地小) 大瀧和彦(加茂小)	藤野圭一(足代小) 為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	細川文男(櫟生小) 松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼) 井上淳子(足代幼)	大瀧和彦(加茂小) 小笠松美(王地小)	為実敬子(西井川小) 藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小) 真鍋宏実(馬場小)	竹野啓治(大和小) 篠原聡(下名小)	松村直也(和田小) 細川文男(櫟生小)
5	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小) 志磨昭子(大和小)	谷恒二(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼) 矢野聡子(出合幼)	辻宏明(芝生小) 田岡茂樹(加茂小)	中川糸子(足代小) 齋藤孝(西井川小)	坂本武彦(白地小) 伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小) 田中敬子(上名小)	大瀧和彦(吾橋小) 大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼) 國金砂恵子(野呂内幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼) 大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小) 中川斉史(三庄小)	真鍋宏実(昼間小) 土井清子(井内小)	中川法子(池田小) 川人成子(三縄小)	井後辰哉(政友小) 峯川郁代(山城小)	濱口久弥(吾橋小) 森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫟生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫟生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫟生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	瀧本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	
27	真鍋友子(辻幼)	大西勇貴(加茂小)	藤川美香(西井川小)	新藤茂美(箸蔵小)	長岡鷹太(吾橋小)	
28	加藤由美(辻幼)	木村麻紀子(三庄小)	玉木恵子(芝生小)	上浦大輔(池田小)	瀧下光子(政友小)	
29	岡尾千恵(山城幼)	岡田直人(足代小)	岡慎太郎(辻小)	松本美穂(三縄小)	竹内友梨(山城小)	
30	山本眞由美(白地幼)	曾我部悦嗣(昼間小)	大西利江子(王地小)	中川法子(白地小)	岩崎順子(櫟生小)	
R1	藤川孝子(足代幼)	鮎川美加(加茂小)	伊丹智子(西井川小)	前田泉季(馬路小)	喜多芳恵(山城小)	
2	宮成典子(加茂幼)	筆本晴香(三庄小)	徳永直(芝生小)	高田寛子(箸蔵小)	中岡加代子(東祖谷小)	
3	佐藤知美(辻幼)	横山万莉菜(足代小)	笹田季生(王地小)	中妻美穂(池田小)	齋藤早織(下名小)	
4	赤堀奏子(池田幼)	逸見香織(昼間小)	住友優花(辻小)	中瀧由紀(三縄小)	養護部会	

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

中学校

年度	中学校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
H1	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	島本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友真弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネヒー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友真弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			
27			芳川未弥(西祖谷中)	岡田祐佳(東祖谷中)	
28	石崎雄一(三好中)	石橋洋平(三野中)			
29			平尾昌彦(池田中)	西昭弘(山城中)	
30	天竹雄紀(三加茂中)	三好佐知(井川中)			
R1			谷口真美(西祖谷中)	藤村美咲(東祖谷中)	
2	大田悦彰(三好中)	入交理子(三野中)			
3			徳善咲紀(池田中)	仁尾芳人(山城中)	
4	佐藤真也(三加茂中)	田口智也(井川中)			